

The Gallery voice

NO-56

編集・発行／画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX(098) 888-6117 / 2014.1.11
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa JAPAN www.galleryokinawa.com

ここから見えるもの

金城徹

最近気になり始めた事に「窓」の存在がある。
向こう側とつながっているようで、確実に境界
として存在している。

安心感が生まれるような。その分「向こう側」
として、鈍くなるような。

それを隔てるだけで同じものを見ていても見え
方が違っていたり。そう考えると面白いけれど
少し不安にもなる。

向こう側と認識している場所から今いる場所を
見るとどう見えるのか。

光の差し込んだ磨りガラスの窓の前に座り、
ボーっとそんな事を考える。



シリーズ「重なる記憶」・2013 年

鉄錆を使っているとよく聞かれる事がある。

「きっかけは？ どうして？」明確な答えが出
せる訳ではないけれど・・・



塗装された壁から溢れるように流れ出たもの
ざらついたフェンス

木材にうたれ、シミをつくっているもの
ブランコの鎖を握ると手にうつるもの

どれもが人の思惑から外れて小さな抵抗をし
ているよう・・・。こういう魅力的なことがあ
ちらこちらで見られる。特別な出会いとは違っ
たごく当たり前に存在していて、自分にとって
はそれが絵の具を使用するよりもずっと現実感
があり、表現したい『自分の日常から見えるも
の・感じる空気・重ねた時間』ということに大
切な存在だと感じているからだ、・・・今はそ
う思う。



(きんじょう・とおる／美術家)

時と場所の記憶

藤田俊次

私の知る金城徹氏は、美術家であり鉄錆の愛好家だ。そもそも、鉄の錆とは「高炉で鉄鉱石にエネルギーを与えることで、炭素が鉄鋼石を還元し、鉄となる。その還元された鉄が酸化し、エネルギーを失って安定的な状態へかえろうとする過程に生じる結果である」とある。人工物の永遠性を低下させる「負」の要素として見られる錆は、自然界からみれば安定した状態をさすようだ。

常に、人々は自然と対峙してきた。美術も建築も、その時代時代の環境における体験から、解釈され形作られる。近年、鉄やコンクリートなど自然の力に負けない人工物が生み出されてからは、全体主義から個人主義へと道筋が変わり、自然との対話を忘れ始めているのが現状だ。強い日射しから身を守るために、木陰ではなく日焼け止めクリームや日傘を必要とし、より物質的で個人的な物へとシフトしている。それでも沖縄のような驚異的な自然の力が存在する土地においては、話が違ふ。街を歩けば、幾重にも塗られたペンキやトタン、錆びた痕跡、壁の隙間に根をはる植物など、人と自然との奮闘が目に映る。自然から目を背けようとしても、その力の大きさを感ぜずにはいられない。特に、潮風が年中吹き抜けるこの地では、当たり前のようにモノが錆びる。不錆鋼のステンレスの看板でさえも、腐食するから恐ろしい。すべての人工物が、勢いよく自然へと回帰していく現象を目の当たりにする。

そんな環境下の沖縄で、その自然現象と対話し、新たな「感性」というエネルギーを与え、アートとして昇華させているのが、金城徹氏の美術作品である。

自然へ向かう時を止める、または意図的に腐食させ「錆」という時間を進行させる。錆という媒体を操作し観察する事が、とにかく楽しいと金城氏は言う。彼の目には、錆の色彩の無限に広がる可能性が映っているようだ。そして、実験の如く、モノや場所の記憶を作品に留めていく。

白い箱の中に錆で描かれた鉄塔や街の稜線、その空間の中に芽生えた鉄の植物。そこには、自然と時間がつくり出す風景そのものがある。何年も風雨にさらし、腐食させた鉄のプレートの表面を紙にプレスし、そこに刷毛目のような心地よいリズムで箔を加えた作品「それぞれの一日」も、堆積した時間を内包し、ある瞬間を陰影として記号化した作品である。多くの方は、その変化そのものを止めようと努力し、ある一瞬が永遠であるかのように「時」を切り取って排除しようとする。しかし金城氏は、それを取り込み、更に別の次元へと変換している。

錆び付いた門扉や錆びた看板のある風景は、どこか寂しさを誘うが、生活感や郷愁感を伴う馴染みがあるものだ。全てが真新しい世界には、そのような感情は生まれず、むしろ空虚感を覚える。人と自然の営みを否定せず、その経年変化を受け入れると急に全てが愛おしい事象へと変容する。

複数の円形の錆跡や飛行機を転写した作品を観た観覧者たちが「銃弾の痕跡」や「基地問題」を意識しているのかという話をしていたことを伝えると、彼はそれについて「そういう意図はありませんよ」ときっぱりと否定していた。普段、あまり作品の説明をしない人柄だけに、印象的に残っている。しかし、そういう感覚を観る側に与えるのも、その作品自体の時間軸が、沖縄にあるからだろう。身近な「今」を表現しながらも、沖縄の時の流れをしっかりと内包し、対話する作品である所以なのかもしれない。

アートが本来持っている、人への共感や永遠性。それは常に、自然との対話から生まれている。人と人ではなく、人と自然。その組み合わせは、より素直な個性を引き出している。作品を手にした人の暮らしに静かに入り込み、その空間で再び、時の歩みをゆっくりと進めはじめる。自然へと近づくものを、新たなカタチへと再構築する感性を兼ね備えた金城氏が、これからも見せてくれる世界を一鑑賞者として楽しんでいきたい。

(ふじた・しゅんじ / GARB DOMINGO 代表)

TOHRU KINJO



1979年 沖縄県生まれ

2006年 沖縄県立芸術大学造型芸術研究科絵画専修
修了

2009年～沖縄県立芸術大学にて非常勤講師

■個展

2003年 金城徹展-跡- 県立芸大図書・芸術資料館

2005年 金城徹展-個- 県立芸大図書・芸術資料館

2006年 金城徹展-記憶- 喫茶「つる」

2011年 金城徹展-1から生まれる10- GARB DOMINGO

2012年 金城徹展-それぞれの1日- GARB DOMINGO

■グループ展

2002年 七味唐辛子展 県立芸大図書・芸術資料館

2003年 画賊 前島アートセンター

五may展 県立芸大図書・芸術資料館

七味唐辛子展2 那覇市民ギャラリー

NAHABI EXHIBITION 那覇市民ギャラリー

Let's Peep The Exhibition of Contemporary

Art from OKINAWA MAギャラリー(福岡)

2004年 NAHABI EXHIBITION 浦添美術館

油日和 展 県立芸大図書・芸術資料館

Laid Back Art from OKINAWA

ギャラリーおおくぼ (福岡)

2005年 HAP展 那覇市民ギャラリー

Laid Back Art from OKINAWA

ギャラリーおおくぼ (福岡)

2006年 彫刻の五・七・五-かたちで詠む春夏秋冬-

那覇市民ギャラリー

点在する視点 県立芸大図書・芸術資料館

Laid Back Art from OKINAWA FTスカラ

(福岡トヨタビル3F)

結展 ギャラリーアトス (沖縄)

P-Point展 県立芸大図書・芸術資料館

2007年 全選択絵画展 那覇市民ギャラリー

結展vol.2 ギャラリーアートポイント(東京)

彫刻の五・七・五HAIKU- sculpture 2007

県立芸大図書・芸術資料館

2008年 ちょうちょ結び展 沖縄県立美術館県民ギャラリー

P-POINT展 県立芸大図書・芸術資料館

未来への視座 ギャラリーTEN (東京)

2009年 結展vol.3 アートスペース羅針盤 (東京)

風のいろ展 GALLERY CAFE TOTO(熊本)

彫刻の五・七・五HAIKU- sculpture 2009

県立芸大図書・芸術資料館

未来への視座 ギャラリーTEN (東京)

2010年 本村佳奈子・金城徹 2人展 吉田町画廊(横浜)

アートスペース羅針盤セレクション展

～油画の可能性～アートスペース羅針盤(東京)

P-POINT展 県立芸大図書・芸術資料館

結展vol.4 沖縄県立博物館・美術館県民ギャラリー

2011年 風のいろ 大宝堂ギャラリー (熊本)

アートスペース羅針盤セレクション展 (東京)

ことりの蒔いた種 GARB DOMINGO

未来への視座 ギャラリーTEN (東京)

結展vol.5 gallery cafe&bar 葉っぱ

2012年 版と言葉展 県立芸大図書・芸術資料館

風のいろ 熊本県立美術館分館

アートスペース羅針盤セレクション展 (東京)

2013年 アートスペース羅針盤セレクション展(東京)

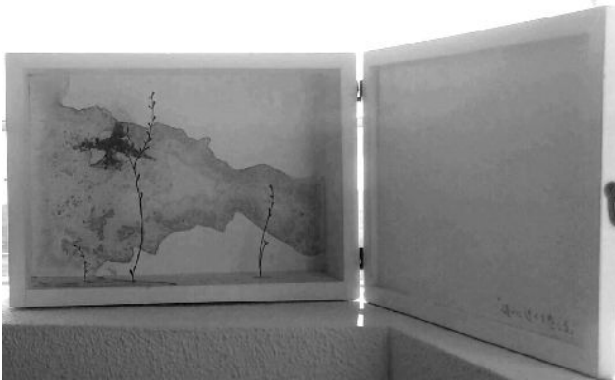
風のいろ 熊本県立美術館分館AKINAI展 (大阪)

版と言葉展 県立芸大図書・芸術資料館

窓からみえるもの

田原美野

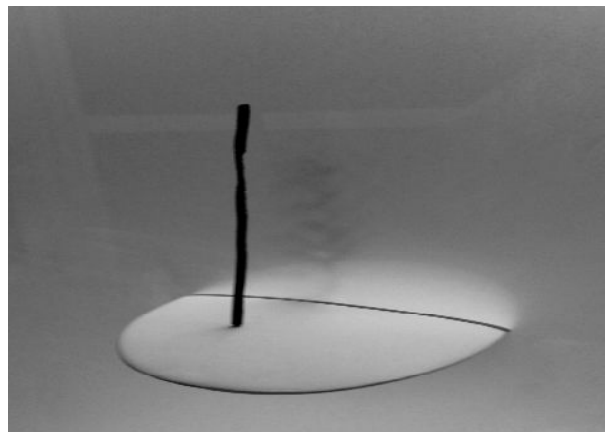
小さな箱の中にあるのは繊細な植物らしき芽。しかし鉄でできたその芽は、生長はせずとも、酸化という変化を続け、変色し、茶色の錆びを痕跡として残していく。芽が出た向こうの空には鉄塔や飛行機が描かれている。毎日の何気ない風景のなかに、小さな変化を見つけ、それを楽しみ、大事にしたいという作家の思いにふれた気がした。しかしこの箱のシリーズを2度目にみたときには、違う印象を持った。箱には窓がつき、のぞいてみると、磨りガラス越しの向こう側には何かが見える。影だけがぼんやりと映り、はっきりしない。気になり箱の裏側にまわってみると、こちら側で想像していたものとは別の景色が広がっていた。



「遠くに近くを感じる」2012年

金城が最近気になるという「窓」は、今展のキーワードのひとつとも言える。金城は窓について「安心感があるものの、不安にもなる」という。窓がこちらとあちらという、明確な境界の役割を果たす一方で、窓越しに見えるのは、現実の一部分でしかない。しかも磨りガラス付の窓越しともなれば、光や影、その輪郭

は感じられても、直接のそれをみることはできず、向こう側を想像するしかない。全容を確認し、それ以上の情報を知りたければ、自ら窓の向こう側に行かなくてはいけない。つまり、あちら側へ。相手の立場に立って考えてみる。子どもが、友達にいたずらや意地悪をしたときによくそうなだめるのだが、大人であっても、実際にその思考を持つことは容易ではない。対立する立場の相手であればなおのことである。金城は、「窓」という装置によって、自分の立っている場所とは別の場所の存在を意識させる。と同時に、磨りガラスを効果的に使うことで、その立ち位置から見えている風景が、ごく限られた情報で処理された理解であることに気づかされる。ここからみえているものが、むこうからは、どうみえるのか。想像力をはたらかせてみるからこそ、コミュニケーションの始まりなのかもしれない。わずかでも、共通の言語や認識を見つけることから、人の対話は生まれる。金城は今後、どのような向こう側を描くのだろうか。身近で日常性を帯びた素材をつかひながら、こちら側で痕跡を残しつつ、不確かでも、向こう側の存在を認め、思いをめぐらせようとする作家の眼差しに、可能性と希望を見る思いがする。



(たはら・みの／画廊沖縄スタッフ)